

氏名	松野敬文
学位の専攻分野の名称	博士（芸術学）
学位記番号	甲文第93号（文部科学省への報告番号甲第340号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2010年9月8日
学位論文題目	バルテュスの初期作品における人物像と空間表現
論文審査委員	（主査）教授 加藤 哲 弘 （副査）教授 永 田 彰 三 山 縣 熙（大阪芸術大学教授）

論文内容の要旨

本論文は、ポーランド系フランス人の画家バルテュス（Balthus, Balthazar Klossowski de Rola, 1908-2001）の初期作品を手がかりにして、この画家による人物像や空間表現の独自性を制作技術という造形上の観点から考察し、その芸術性に対する従来の比較的高い評価を批判的に再検討しようとするものである。

本論文は、序論と3部6章の本論からなっている。序論では、まず先行研究の状況が3つに分けられて検討される。それによれば、バルテュスをめぐる言説は、彼を古典主義的な画家として賞賛する「神格化グループ」が先行し、次いで、少女の裸像を好んで描く特殊な性的嗜好を礼讃する「特殊化グループ」が加わった。最後の3番目の解釈グループは、史料に基づいた分析や、歴史的見地からのコンテキスト分析に基づいた実証的研究を実践する「相対化グループ」である。論者の松野氏も、この第3のグループに自らを位置づけている。ただし松野氏は、絵画の絵画性が軽視されがちな従来の研究状況に対する批判的反省から、社会史的背景や、図像解釈によって解明される精神的内容に立ち入ることは最低限にとどめ、むしろ人物像や風景といった造形上の構成要素の分析に焦点を絞ら込む。

第1部第1章では、バルテュスによる造形表現の典型的な例として自画像《猫たちの王》（1935年）が取り上げられている。この作品が選ばれたのは、それが、この画家による数少ない自画像のうちで最初に描かれた1点であり、しかも、そこには、画家が理想とするバイロン風の紳士像が、奇抜な構成と興味深い小道具とともに再現されているからである。自画像を描く行為は、伝統的には、たとえばバルテュスが憧れていたドラクロワの場合がそうであるように、画家の圧倒的技巧を誇示することで、芸術家の自己顕示欲を満たそうとするものであった。しかし、バルテュスは、少なくともこの作品では、写真機などの機械によって自らの技術不足を補うのではなく、それらによっては再現しえない違和感や居心地悪さが表面化する状況を結果的に巧みに利用しながら彼自身を表現した。松野氏は、こうして出来上がった奇妙なイメージのうちに、21世紀のサブカルチャーにもつながる新しい人体表象のありかたを見てとっている。

第2章から第5章までの第2部では作品を制作年代順に並べ、画家の歩みを通史的にたどる。扱われる作品は、ピエロ・デッラ・フランチェスカのフレスコ壁画の模写（1926年）とパリを題材にした風景画《河岸（ボン・ヌフの近くの堤）》（1929年）、1934年4月の最初の個展に出品された屋内の单身像《鏡のなかのアリス》と屋外の群像《街路》である。また、論文全体の締めくくりとなる第3部第6章では、もうひとつの基本作品の分析として、集大成的な大作《山（夏）》（1937年）が検討される。

これらの分析から明らかにされる「バルテュス絵画の特性」は、基本的には第1章での結論と変わることはない。論者にとって、ピエロのフレスコ画模写は、部分的かつ稚拙な様式引用による既成イメージの自作への巧みな取り込みであり、《河岸（ボン・ヌフの近くの堤）》では、形態の解剖学的な構造や画面上における光源の処理の不整合が故意に漠然と操作されることで、素描やフォルムの欠陥の露呈が回避され、読者は困惑のうちに幻想的な雰囲気包まれる。また、《鏡のなかのアリス》と《街路》でも、造形上の形態表現は、技術的処理の不充分さを目立たなくさせるために、いわば意図的に曖昧なものにされ、その結果、奇妙な違和感をもたらす薄気味悪い雰囲気が醸し出されることになる。そして、《山（夏）》でも結論は変わらない。論者は、画家が崇拝していたプッサンやクールベらの作品との比較によって、ここでも「自然主義に対する画家の無関心」のありようを明らかにする。

以上からの結論によれば、バルテュスの芸術家としての独自性は、技術の欠乏と高い評価や名声との落差のなかにある。しかし、すでに述べたように、自然主義的に消極的なものを芸術的に積極的なものとする絵画制作のありかたは、けっしてバルテュスだけにとどまるものではない。この傾向は同時代の他の画家に、そしてまたそれらからの影響の浸透と拡散を経た現代のサブカルチャー、コミックやアニメーション、デジタル・イラストレーションといった視覚メディアにおいても共有されている。技術的貧困という見地からバルテュス作品を再検討したことで、この画家を従来のステレオタイプ的な受容から切り離し、新しい文脈のなかに位置づけていくことが可能となるとともに、バルテュスの現代的意義もまたその過程で明らかになると論者は主張する。

論文審査結果の要旨

本論文は、松野敬文氏が学部学生の頃から取り組んできたバルテュス研究の成果をまとめたものである。その意味で、本論文における作品分析は包括的であると同時に緻密で詳細なものになっており、結論は、これまでにない新たな解釈と新鮮な問題提起を含んでいる。

本論文において具体的に評価すべき点は、以下の3点に要約できる。

まず、本研究が高い実証性を有する点。従来のバルテュス研究は、客観的な論証を回避した過剰な美化や神秘化の影響を受けがちであった。松野氏は、作品に対する愛着を維持しながらも、先行言説からの影響を最小限にとどめる。そして氏は、可能なかぎり多くの文献や画像資料を渉猟し、その検討結果を本論文での考察の根拠とすることで、論述の客観的普遍妥当性を保持しようと努めた。添付された文献一覧、画像とそのリスト、年譜などは、それだけでも、今後の研究のための貴重な資料となることであろう。

次に評価すべき点は、本論文が画面の精緻な形態分析にもとづいていることである。バルテュス研究における「相対化」の潮流は20世紀末になってはじめて現れてきた。しかし、その中にあっても、美術史的な絵画研究にとって最も基本的だと考えられる、いわゆる「画面分析」を実行するものは、これまでほとんど見られなかった。それに対して、本研究は、従来の文学的研究の成果を十分に踏まえたうえで、それらとは一線を画しつつ、あくまでも絵画そのものに密着する姿勢を貫いている。その結果、本論文は、バルテュスの作品が醸し出す「不思議な印象」の原因を明解に論理的に説明することに成功している。

最後に、そして、おそらくは最も鮮明に本論文の評価すべき独自性が表れているのが、バルテュスを「21世紀の画家」として特徴付けた点である。この画家の特徴は、過去の古典的な絵画伝統を継承する点にあるとされてきた。しかし、本論文で松野氏は、バルテュスの作品と、それらが関連を持っているとされる西洋美術史上の画家の作品とを造形面から比較し詳細に分析することで、両者の間には決定的な差異が存在することを明らかにした。氏によれば、バルテュスにおける画像生産の技法は、過去の絵画伝統にもとづくというよりも、むしろ、それらを巧みに利用する「イメージ戦略」の点で、この画家にとっては「未

来」の21世紀の視覚文化状況を先取りしていた。バルテュスのアクチュアリティを明確に指摘するこの主張は、真摯な学問的研究を映像や動画の領域でもすでに多く積み重ね、本学の総合コースでもその分野での講師を勤める松野氏ならではの見解として評価したい。

なお、本論文にも限界や未熟な点がないわけではない。たしかに本論文は、研究の方法と範囲を造形面に限定することで、ある程度明解な結論を導き出すことができた。しかし、その反面、バルテュスの絵画が技術的に未熟であるという結論をどのように意味付けるかという点では不満が残った。「内面」に踏み込んでいく危険を意図的に避けたことは、ある意味では賢明であったかもしれない。しかし、そのために議論がそれ以上の深まりを示しえなかったことは惜しまれる。次に、演劇面からの考察が不足していることについても指摘をしておかなければならない。バルテュスは演劇における衣装デザインにも関わっており、その分野では、必ずしも「技術的貧困」との性格付けはあてはまらない。また、本論文には、造形分析をもとに、「光源の複数性」が招く構成上の混乱についての主張があるが、演劇の舞台照明を想定すれば、もっと別の結論が得られたかもしれない。さらに言えば、現代のサブカルチャーとの関係についても、具体的な状況に即して、もう少し詳しい説明と根拠付けが望まれる。

これらは、本論文が現時点で内包する限界であり、その克服は、今後、松野氏が研究者として自立していくうえで取り組まなければならない課題となるであろう。しかし、これらの問題点を勘案しても、本論文は博士論文としての条件を十分に満たしている。本論文審査委員3名は、論文の審査ならびに2010年8月7日に実施された論文発表とそれに続く公開審査会での口頭試問の結果により、松野敬文氏が本論文によって博士（芸術学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告する。